

中古と中世文学における竜宮訪問のモチーフの変遷

Adam Tomšů (トムシュー・アダム)

カレル大学哲学部東アジア研究所日本学科・修士一年

竜宮訪問を主題とした物語 (narrative) は、日本文学史上、浦島伝説をはじめ、現代に至るまで頻繁に見られる。竜宮訪問の物語の主人公たちは、人間界を後にし、いわゆる異界へ出発し、そこで竜王やその娘という超自然的な登場人物に出会い、呪具を賜り、帰還する。この基本的な物語の構造は、様々な物語に認められながら、物語の設定、登場人物、賜った呪具やその機能等に、ある程度の相違が存在しており、また、物語の位置づけや語りの技法も、当然ながら、様々である。

上記に言及した浦島伝説は、今日、浦島太郎が亀姫と竜宮を訪問するという展開で一般的に知られていると思われる。しかし、浦島伝説に竜宮が物語の設定になっている最古の資料は、やや後期の室町時代の御伽草子であり、それ以前の資料に竜宮が見られないことが注目される。具体例を挙げると、上代の資料において主人公の浦島子が訪問するのは、「竜宮」ではなく、「常世の国」あるいは「蓬莱山」である。

そこで、本発表では、いかなる理由で浦島が竜宮を訪れるようになったのか、との経緯について考察する。具体的には、浦島伝説の最古の資料まで遡り、『日本書紀』、『萬葉集』、『丹後國風土記』を取り上げ、『今昔物語集』、『古事談』、『太平記』の、中古と中世の資料における竜宮訪問の諸物語との比較を行う。物語の基本構造の予備的な比較には、V・プロップの『昔話の形態学』(1928)で提案された物語の機能の分析方法を採用し、浦島伝説の構造がいかに移り変わっていくかということを把握できるだろう。次に、物語の登場人物、呪具、設定との三つのカテゴリーを中心に比較する。その結果、顕著な類似性が明らかになるだろう。

また、物語の内容以外、語りの技法にも注目し、D・ヘルマン(2013)の学際的な、認知物語論的アプローチを運用し、対象の物語における焦点化の技法について考察する。対象の物語の中に、焦点化の面でやや特殊な『今昔物語集』巻十六第十五話がある。この竜宮訪問の説話は、『今昔物語集』巻十六の諸説話と同様に、観音霊験譚にもなっている特徴がある。語りの技法がこの物語の観音霊験譚としての構成をいかに左右しているのか、観音霊験としての解釈にいかなる影響を及ぼしているのか、との疑問を追及し、竜宮訪問のモチーフの変遷について考察する。